

Title	複合語における「人(ヒト・ビト)」の音便について(二〇一二年度卒業論文要旨集)
Author(s)	稲葉, 朋子
Citation	札幌国語研究, 18: 75-75
Issue Date	2013
URL	http://s-ir.sap.hokkyodai.ac.jp/dspace/handle/123456789/7599
Rights	

複合語における「人（ヒト・ビト）」の音便について

国語学第二研究室 九四一二 稲葉 朋子

後項が「人（ヒト・ビト）」である複合語には、「仲人（ナカウド）」や「商人（アキンド）」のように音便化するものがある。本研究では、後項の「人（ヒト・ビト）」が音便化する理由について考察することを目的としている。

中世・近世では、音便形と非音便形が同一文献上に現れる資料がある。そこで、中世・近世において、後項の「人（ヒト・ビト）」に音便化がみられる複合語の使用状況を明らかにした。さらに、辞書をもとに音便形と非音便形の使い分けを意味の違いから分析した。また、三文字の複合語において、最後の結合点と音便化との関係を考察した。

中世・近世の資料では、音便形・非音便形などの語形が固定することなく現れる。ここから、音便形と非音便形は使い分けられている可能性がある。音便形と非音便形の意味を比較したところ、「宮人（ミヤウド）」は音便形より非音便形の意味が広い。「方人（カタウド）」は音便化によって新たに意味が加えられ、サ行動詞化する。このように、異なる意味を表現するために音便形を用いる複合語がいくつか確認できた。音便化しない複合語を結びつきに注目して分析した。最後の結合点が「人（ヒト・ビト）」の直前にある複合語は、前項と後項の「人（ヒト・ビト）」との結びつきが弱いため音便化しないと考えられる。